

## @銀閣寺

東山の麓、五山送り火で知られる大文字山麓に、慈照寺(じしょうじ)はある。銀閣寺(ぎんかくじ)とも呼ばれる。山号は東山(とうざん/ひがしやま)という。

寺号は、足利義政の法号「慈照院殿准三宮贈大相國一品喜山道慶」に因る。俗称の銀閣寺は観音殿の通称であり、江戸時代に足利義満造営の金閣寺に対して呼ばれるようになったという。

臨済宗相国寺派、相国寺の山外塔頭(別格地)の一つ、本尊は宝冠釈迦如来坐像。  
1994年、「古都京都の文化財」17の資産(社寺城)の一つとして、世界文化遺産に登録された。

室町時代、1465年、室町幕府8代将軍・足利義政は伊勢貞親に命じ、鹿ヶ谷に山荘の予定地を検じさせた。南禅寺塔頭・恵雲院(えうんいん)の地だったという。

1466年、義政は、東山恵雲院付近に山村造営の計画を立てた。美濃に材木を求める。  
1473年、義政は長氏・義尚に将軍職を譲り、浄土寺跡に山荘建立の工事を始める。  
1482年、浄土寺山麓の跡地(墓地)に、義政により東山山荘(東山殿)が営まれた。  
東山殿の名は、第103代・後土御門天皇により贈られた。山荘造営のための段銭、夫役を課す。

1486年、義政の持仏堂として東求堂が建てられる。西指庵門が建てられた。  
1487年、義政は東山殿観音殿造営に伴い参照のために鹿苑寺に参詣する。  
1489年、現在の観音殿(銀閣)が上棟される。(『蔭涼軒日録』)  
1490年、義政は山荘で亡くなる。

その没後、遺命により東山山荘(東山殿)を臨済宗相国寺派の禅寺に改める。持仏殿を仏殿とした。臨済宗の僧・夢窓国師を迫請(勸請)開山とし、相国寺の宝処周財を迎えた。寺号は義政の院号・慈照院殿喜山道慶に因み慈照寺になる。以後、歴代は相国寺より入寺した。

1491年、慈照院は慈照寺と改名され、東求堂が本堂とされた。  
2007年、学術調査により、当初より銀閣に銀箔が貼られていなかったことが判明する。

◆足利義政 室町幕府8代将軍・足利義政(あしかがよしまさ、[1436-1490](#))。父・義教の暗殺、兄の早世により、9歳で家督を継ぎ、1449年、14歳で室町幕府8代将軍に就いた。

1455年、正室になった日野富子との間に嫡子はなく、1464年、弟・義視(よしみ、義尋)を後継者とする。だが、1465年、実子・義尚の誕生により、将軍職を巡る抗争になった。

義政側の山名宗全と、義視側についた細川勝元、さらに管領家の斯波、畠山氏、諸大名を巻き込んだ応仁・文明の乱(1467-1477)になる。1473年、義政は実権を8歳の子・義尚に譲り隠棲し、1485年、出家し喜山道慶と名乗る。最晩年の義政は、銀閣寺の造営に固執した。だが、1489年、後継者の義尚は24歳で早逝する。その跡を追うように、翌年、義政も急逝した。

学問、芸術、和歌などに優れた。死の直前まで観音殿の内装について指示を出したという。だが、その完成を見ることはなかった。義政の歌「何事も夢まぼろしと思ひ知る身にはうれひも悦びもなし」。

◆足利義視 室町時代の武将・足利義視(あしかがよしみ、[1439-1491](#))。義教の子、義政の弟。1443年、浄土寺に入室させられ義尋と称した。1464年、義政の後継に指定された。還俗して義視と改名、1465年、参議・左中将、権大納言に進む。富子に義尚が生まれると将軍家跡目争いとなる。1466年、義視暗殺を計画が起こる。1467年、応仁の乱により義視は伊勢に逃れ、西軍に投じ将軍格となる。乱後は、美濃茜部に寓居した。1490年、義政の死で嫡男義材(義植)の後見となり、義材任官、准後の宣を受けた。

◆善阿弥 室町時代の庭師・善阿弥(ぜんあみ、1386-1482)。名手とされ、相国寺の『蔭涼軒日録』に「河原者善阿弥」として登場する。同朋衆として足利義政の寵愛を受けた。作庭はほかに花の御所など。

◆仏像・木像 ◆方丈に秘仏の本尊「宝冠釈迦如来坐像」が安置されている。南北朝時代作という。高く結いあげた髻(もとどり)に宝冠を被り定印を結ぶ。2尺(60cm)の坐像で、鳴滝三宝院の僧・日護の作という。当初は盛上げ彩色が施されていたという。檜材、寄木造、玉眼嵌入。

◆脇に、「達磨大師坐像」(55.8cm)を安置する。口には歯が見えている。江戸時代作になる。朱に彩色の衣、頭に法衣を被る。その下前に彩色の開山・「夢窓国師像」がある。

◆東求堂は、かつて足利義政の持仏堂であり、阿弥陀三尊像を安置していた。現在は、仏間須弥壇厨子内に、室町時代の秘仏「阿弥陀如来立像」(65cm)を安置する。与願施無畏の来迎印を結ぶ。衣文は截金彩色。舟形光背。快慶の安阿弥様式。かつては、阿弥陀三尊像、障子に狩野正信筆「十僧図」が描かれていたという。

◆東求堂仏間の西に、室町時代作の「足利義政像」(118cm)がある。法衣姿であり、等身大の結跏趺坐、禪定印を結ぶ。没後間もなく造立されたとみられ、1485年に出家した頃の姿を写實的に表している。木造、寄木造、彩色、玉眼嵌入。その北に位牌棚がある。

◆銀閣初層の心空殿、奥の間の須弥壇、唐破風厨子内に室町時代初期作の「地藏菩薩坐像」、「千体地藏菩薩立像」を安置する。

◆銀閣上層の潮音閣の須弥壇に、室町時代の秘仏「観音菩薩坐像」(54cm)を安置する。憂いある表情に結跏趺坐、定印を結ぶ。なお、後補の光背の背後に木造洞窟(岩屋)が付き、洞中観音ともいう。岩洞は建仁寺より移されたともいう。岩屋観音像ともいわれる。台座も後補になる。

◆東山文化 東山文化の舞台になった東求堂内の書斎屋「同仁齋(どうじんさい)」は「聖人視而同仁齋」(聖人は人によって区別することなく、平等に仁愛を施すの意)から名付けられた。現存する最古の書院造になっており、四畳半茶室の原型と伝えられている。

義政は、諸芸の達人を身分の分け隔てなく東求堂に集めたという。特に、同朋衆と呼ばれた画家、茶人、連歌師でもあった能阿弥とその子・芸阿弥、善阿弥などが集った。能阿弥は義教、義政に仕え、書画などの鑑定、管理、東山御物の選定を行った。さらに、書院飾りも手がけた。これらの東山文化とは、禅そのものではなく、禅趣味に連なる美意識との見方もある。

◆銀閣寺建立の経緯 1482年、浄土寺山麓の跡地(墓地)に、東山山荘(東山殿)が営まれた。

義政は造営にあたり資金調達のために、諸国荘園、守護から税を徴収しようとした。だが戦乱、1460年の寛正の大飢饉後の社会混乱から拒否される。そのため、大名、寺社、農民に「御山荘御要脚」「要脚段錢(たんせん)」「御普請料」などの税を強引に課した。本来は御所造営に充てられるべきものだった。また、分一徳政令と分一徳政禁制を交互に使い、債権者、債務者の双方より分一錢を徴収した。関所は廃止し、新たに京都七口に関錢を課した。

義政は、山城国内の荘園領主に、費用のみならず人夫を毎年課した。社会の混乱、重税などに対し、1485年に山城国一揆が起きる。それでも、山荘の造営が中止されることはなかった。また、義政は、造営に際して、京都・奈良などの大乘院、長谷寺、東寺、等持院などから資材、名石や庭木を持ち出し、庭を整えたといわれている。このため、義政没後、もとの持ち主がこれらを取り返した。後世、織田信長は、1569年の二条城造営に際し、当寺から九山八海石を移したという。

◆創建時の建築 山荘の建設は、室町時代、1482年-1490年の8年間続けられた。建物は、義政の祖父・義満の残した西芳寺の徹底した模倣が行なわれた。建築資材は、奈良初瀬山の檜材による。

◆東求堂「東求(とうぐ)堂」(国宝)は、本堂の東にある。室町時代、1486年に建立された。最古の書院造になる。東求堂の名は、相国寺住持・横川景三の撰による。「東方の人、念仏して西方に生ずるを求む」(『六祖壇経』慧能)に因む。義政の西方極楽浄土の願いが込められている。

◆同仁齋 東山文化の舞台になった「同仁齋(どうじんさい)

(国宝)は、中唐の韓愈『原人』の一節、「聖人視而同仁齋」(聖人は人によって区別することがなく、平等に仁愛を施すの意)から名づけられた。

現存する最古の書院造になる。義政は、この室で、書齋、文物の飾り座敷として使い、名画名物の観賞、同朋衆により東山御物の選考などをさせていた。

解体修理により、天井から「みろりの間」の墨書が見つかり、この部屋で点茶が行われていたとみられている。

◆観音殿(銀閣)「観音殿(銀閣)」は、室町時代、1489年に上棟された。江戸時代中期より「銀閣」と呼ばれたという。(『山州名跡志』)。西芳寺の瑠璃殿に倣った。また金閣の二層・三層を参考にしたともいう。義政が晩年に建てた東山山荘であり、死後に菩提を弔うための寺とした。

金銅製の鳳凰が棟飾になっている。東を向き、観音菩薩を守護する。なお、銀箔は一度も施されなかった。下層は「心空殿(しんくうでん)」と呼ばれ、東を正面とする。六畳仏間の拭き板敷、吹寄格天井。北に六畳間があり、北西に階段がある。東側正面にのみ吹放しの縁、広縁があり、引違の腰高障子、杉戸、書院造。

上層が「聴音閣(ちようおんかく)」と呼ばれ、16畳板敷の禅式仏殿(禅宗式仏間)であり、南を正面としている。部屋の西中央に須弥壇に観音像を安置する。創建時には、軒周りに帯状模様、花柄の極彩色などが施されていた

◆庭園 庭園は、北、東、南の三方を山に囲まれている。上下二段に大別され、上段は枯山水庭園の漱蘇亭(そうせんてい)跡の庭園、下段は錦鏡池(きんきょうち)を中心とした池泉回遊式庭園になっており、庭園の発祥になったという。四方正面の庭ともいわれ、どの角度からも観賞もできる。庭園には、義政の浄土信仰、蓬萊神仙思想が表現されているという。

義政が好んだ西芳寺(苔寺)を手本に作庭された。義政は、西芳寺に20回近く遊覧した。当初、西芳寺は女人禁制になっており、義政の母に庭を見せることができなかった。義政は銀閣寺を造営して果たしたともいう。また、天龍寺庭園も参照したともいう。

◆中央に錦鏡池(きんきょうち)が配置されている。池泉は東西2つあり、西に「仙人洲」、東に「白鶴島(はつかくとう)」が造られ、それぞれ「迎仙橋」、「仙桂橋(せんけいきょう)(東)」・「仙袖橋(せんしゅうきょう)(西)」が架けられている。この付近の石組が最も古い。

白鶴島は、北の東求堂側から観ると、中央に「三尊石」に組まれている。さらに、石組は鶴の頭部に当たり、東西に架かる2つの青石の石橋は、鶴の両翼を表すという。小さな前石が2個ある。また、反対の南側の臥雲橋側からは、中島は首をたたみ、翼を休めた鶴の姿になるという。この場合には、白鶴島の右端、仙桂石の傍に立った石が鶴首石、中央の平石が羽石、島の左端に尾がある。当初は池に蓮が植えられていた。

大内石を寄進した大内政弘(1446-1495)は、大内氏第14代当主であり、義政に献上した。

庭は東山から昇る月の観月が意識されている。正面の山は義政により、「月待山(つきまちやま)」と名づけられた。

江戸時代初期、1615年に宮城丹波守豊盛、引き続き、1639年にその孫・豊嗣は建物も庭園も大幅に改修した。この時、月を意識した現在の白川砂の「銀沙灘(ぎんさだん)」、「向月台(こうげつだい)」、「仙草壇」、「銀閣寺垣」が造られた。白川砂(花崗岩質砂)は、白く輝き反射率が高い。銀沙灘は月光を反射させた。

銀沙灘は、高さ35-40cmあり、砂紋は波(中国・西湖の波紋)を表す。

向月台(盛砂)は、底部直径320cm/300cm、頂上部直径1.2m、高さ180cm/165cm/155cm、頂部120cm、傾斜角55度ある。

向月台付近に、かつて東求堂が建てられていたという。

向月台は、銀閣の上からの眺めを考慮して造られたという。また、中国西湖の風景を模して、向月台の上に坐して月が昇るのを待った。

なお、借景としての月待山と、銀沙灘・向月台の描く曲線とは呼応する。これら砂の造型は、江戸時代後期に成立した。当時は、池泉が白い流砂により埋められ、これらの砂を掻き出して造られたともいう。

現在、使用されている砂の総量は10tともいわれている。

向月台の手入れは月に1、2回程度行われている。作業は4人で行い、まず表面の砂を2cmほど削る。白川水と砂を混ぜたものをコテで塗り、叩いて固めていく。

◆手水鉢 方丈から持仏堂に至る廊下の途中に、「銀閣寺形手水鉢(袈裟型手水鉢)」がある。江戸時代作。自然石の上に椀形で持ち上げている。上面の水溜は円、側面は方形で網目意匠(市松模様)は4面それぞれが異なる。創建当初から据えられており、千利休(1522-1591)も写しを造ったという。花崗岩製、高さは81cm。

◆東山水上行 本堂(方丈)に「東山水上行」の扁額が掛かる。「東山(とうざん)水上(すいじょう)を行く」(『雲門広録』)に因む。

一人の修行僧が、仏の悟りの境地とは何かと、中国の禅僧・雲門文偃(うんもん ぶんえん、864-948)に問う。禅師は「東山水上を行く」と答えた。東山とは湖北省にある馮茂山の別名をいう。山は泰然として動かない象徴になる。その山が動き、川の水面を流れ行くとは、人の常識や分別を超えたところにこそ、真の悟りの境地はありと諭したという。

◆送り火 「大文字の送り火」の起源については諸説ある。

足利義政の後継者の義尚(よしひさ、1465-1489)は、24歳で急逝した。新盆に義政は、その菩提を弔うために、家臣・芳賀掃部(ほうが かもん)に命じたともいう。

禅僧・横川景三は、東求堂から如意ヶ岳の山面を望み、「大」の字形を定め白布により模った。その場所に火床を掘り、お盆の16日に松割木に点火し、義尚の精霊を送ったともいう。

1490年、義政は亡くなる。義政は一度だけ送り火で追善したことになる。

◆映画 現代劇映画「暗夜行路」(監督・豊田四郎、1959年、東宝)の撮影が行われた。

時代劇映画「[パッチギ!](#)」(監督・井筒和幸、2004年、シネカノンなど)では、参道が高校生同士の乱闘シーンになった。